

KELES Newsletter

2007年度第1号

事務局：〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

関西大学 外国語教育研究機構 吉田信介研究室内

Tel : 06(6368)0477 e-mail : keles@infoseek.jp URL : <http://keles.hp.infoseek.co.jp/>

2007年6月15日発行



会長挨拶

研究大会、セミナー、そして．．．
瀬川 俊一

紫陽花が周辺の緑に映える季節となりました。程なく足踏みしていた梅雨の到来でしょうか。ご繁忙の日々をお元気にご活躍中の会員の皆様方を想っています。

5月26日・27日に摂南大学で開催いたしました本学会第11回研究大会の際には、会員の皆様方が研究発表・実践報告・シンポジウム等で大会を盛り立てて頂きまして有難うございました。大会の詳細を本号で報告して頂いていますので、参会された方々は大会を再確認するために、校務等のために止むを得ず不参加であった方々には当日の内容確認のために、ご活用下されば嬉しく思います。内容確認後、お気づきのことを事務局幹事一同までご連絡下さいませでしょうか。次回以降の企画に活用したく思いますので、皆様方の率直な想いをお聞かせ下さいませようお願いいたします。

本年度のセミナー（計5回）、卒論・修論研究発表セミナー、来年度研究大会の日程（予定）も併せて報告させて頂いています。会員の皆様方におかれましては年間計画に組み込んで研鑽の一助にして下されば、企画・立案した幹事一同の苦労も報われると言えます。いつも裏方として黙々と本学会発展のために、懸命に縁の下の力餅としての役割を演じて下さっている幹事一同の労苦に報いるためにも、会員の皆様方がセミナー等で自己研鑽し教育実践活動に活用して下さることを期待いたしております。

年金問題等の予想外の案件が急浮上したため、審議等が大幅に遅れてはいるものの、国会での教育改変への動きが急展開中です。本年度中には教育改革関連三法が法制化される見通しとなっています。

何事によらず、外圧によらなければ真の改革は出来ないといわれている我が国のひそみに倣い、教育も、教育界内部からではなく外部からの改革要求が法令化されて実行されようとしています。

法令化されれば、文字通り法に基づいて運用されますから、本来は自発的な自助努力による教員研修にまでも、法による規制が作用することになります。研修しない教員には教員免許の更新を認可しないことを法制化することになります。免許更新のための研修制度についての具体策は未定ながら、大学や公的研修機関での研修単位の累積により更新認可することが予想されます。

幹事会で本学会の諸活動を企画・立案する際に、謂わば時代の流れを先取りして決定し、既に実行しているのが本学会のワークショップ方式による連続セミナーです。これまでも数回、本学会セミナーの意図するところを説明いたしましたように、会員の皆様方の自己研鑽・研修に活用して頂きますよう幹事一同は心から願っています。

専門職である教員としての誇りと自覚を懐いて、今後とも会員相互間の連携を密にしながら、教育実践活動に励もうではありませんか。会員の皆様方のご発展を祈念しながら。

第11回研究大会の報告

今回の大会は、5月26日(土)と27日(日)の2日間、前日までの大雨とは打って変わって、清々しい五月晴れのもと、摂南大学寝屋川キャンパスにて開催されました。里井久輝先生(摂南大学)のご尽力のおかげで、最新のパソコンを備えたCALL教室(4室)が設置された10号館(情報メディアセンター)を会場として使用させていただき、約160名の参加を得て活発な研究活動(実践報告3件、研究発表12件、ワークショップ2件)が展開されました。大会2日目には、東照二先生(立命館大学大学院言語教育情報研究科)による講演が行われ、社会言語学の観点から英語教育への示唆をいただきました。大変充実した2日間でした。また、大会2日目午後には、藪内副会長の司会のもとで総会が開催されました。瀬川俊一会長からの挨拶に続いて議長に斉藤安以子先生(摂南大学)が選出され、以下の1~6について報告および承認がなされました。

1. 2006年度 活動報告(事務局長)
2. 2007年度 活動計画(事務局長)
3. 2006年度 決算報告(会計)
4. 2006年度 会計監査報告
5. 2007年度 予算案(会計)
6. 役員の所属変更について(事務局長)

活動計画においては、第33回全国英語教育学会大分研究大会、第6回セミナー(大阪地区)、第7回セミナー(神戸地区)、第8回セミナー(京都地区)、第9回セミナー(奈良地区)、第10回セミナー(和歌山地区)、第11回卒論・修論研究発表セミナー、第12回研究大会について予告が行われました。

会場校を引き受けて

去る5月26日(土)・27日(日)の両日にわたり、関西英語教育学会第11回研究大会が、摂南大学を会場校として開催されました。発表会場は、昨年4月に完成したばかりの新校舎である本学10号館を使用し、CALL教室4室を中心に、活発に発表やシンポジウムが行われました。

本学に研究大会会場校のご依頼がありましてからは、開催に向け鋭意準備に努めてまいりましたが、当日の会場運営にあたりましては、KELES役員の皆様方のご指導を仰ぎながら、本学外国語部の教員をはじめ、情報メディアセンター・スタッフ・CALLスタッフにもご協力いただきました。お

かげさまで大会当日は二日間ともに天候に恵まれ、多数の先生方にお越しいただき、無事大過なく研究大会を終えることができました。会場校の責任者といたしましてこれに過ぎる喜びはございません。

今回のKELES第11回研究大会は、私どもとして学部の名称を「外国語学部」に変更して初めての学会であると同時に、新校舎で開催される初めての学会でもあり、会場校といたしましていたらぬ点、ご不便をおかけした点多々あったと存じます。深くお詫び申し上げますと共に、今後の反省点といたしまして次回に生かしたいと存じます。

KELES役員の皆様方には、会場運営に支障が生じることはないよう、常に懇切なサポートを賜りましたことあらためて心より御礼申し上げます。

末筆ながら関西英語教育学会のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

里井 久輝(摂南大学)

第1日

シンポジウム1

音読・シャドーイング活用の読解指導法における効果と問題点

倉本 充子(広島国際大学)

氏木 道人(関西外国語大学短期大学部)

西田 明美(愛知大学)

伊藤 佳世子(英知大学・非常勤)

読解の基本的な処理は音韻にも依存しているとの考えに基づき、シャドーイングや音読の読解指導への応用の可能性とその効果、問題点を探ろうとするものであった。

初めに、これらの指導法の読解力養成に対する効果に関して、そのメカニズムを巡って理論的説明がなされた。第1点は、音声を積極的に活用したこういった指導法により、視覚情報として目に入ってくる文字の音韻符号化が促進され、それによってディコーディング処理が効率的に行われ、意味アクセスがそれだけ活性化されるということ。一言で言うと、音声訓練が「オイル」の働きをして、読解過程におけるボトムアップ処理が効率化されるということである。第2点に、効率的なボトムアップ処理の、さらに高次の処理過程(トップダウン処理)への波及効果が挙げられた。読解とは複数の処理が相互に作用する複雑な認知プロセスであるが、上記のようなボトムアップ処理を効率

化・自動化することにより、学習者が持つ限られた認知資源が有効に活用され、さらに高次の認知処理を実現できる、そして、さらに質の高いテキスト理解が実現するというものであった。「オイル」の助けを借りて、「ガソリン」がさらに効率的に燃焼するということである。

次に、2005年度から継続されている「シャドーイング」「(文字を見ながらの)テキストシャドーイング」「ミックス(両者の組み合わせ)」「音読」という4種類の指導の効果に関して、TOEFLや英検等の読解テストを用いて得られたデータが紹介され、これらの指導法の読解力伸長への効果が統計的に検証された。今後は、サンプルの取り方、教員の指導法の標準化、学習者のレベルに応じた教材の選定、学習者の動機付け、当該指導以外の要因の統制といった点も考慮すると共に、これらの指導法が読解力養成にもたらすとされる効果のメカニズムの解明に関してさらに詳しい研究が行われ、興味深い結果が出されることが期待される。

報告者：長谷 尚弥(関西学院大学)

研究発表・実践報告

《第1室》

報告者：氏木 道人(関西外国語大学短期大学部)

間接的提言の理解—英語学習者と英語母語話者の比較研究—

夫 明美(鳴戸教育大学)

本研究では、会話の含意の理解や間接的依頼表現の産出パターンが、母語話者と非母語話者間で異なるという先行研究に基づき、日本人英語学習者と母語話者間で間接的依頼・提言に対する理解度に差があり、それが習熟度により異なるという仮説が検証された。選択式質問用紙による理解度測定の結果、中級学習者の得点は、上級学習者、英語母語話者の両群より低く、有意差が見られた。質問用紙の改善点が指摘されたが、語用論的能力が明示的に教授可能であることを示唆するものとして今後の研究が期待される。

《第2室》

報告者：西田 晴美(愛知大学)

The making I: Negotiated identity and SLA

袁 園(神戸大学大学院)

アイデンティティの形成と第二言語習得がいかに関係するかについて追求した研究発表であった。中国人日本語学習者について質的研究を行い、ターゲット語が話されている国で社会生活を送る場合の言語習得過程を詳細に描写した。学習者が住んでいる社会環境や関わっている人間関係は第二言語習得に強い影響を与えるが、アイデンティティ形成との関係まで追及しているのは興味深い。研究参加者を増やして継続研究を行っているという事なので今後にも期待したい。

《第3室》

報告者：倉本 充子(広島国際大学)

NationのA Vocabulary Levels Testを利用した学生の総語彙数と学習成績との相関性に関する一考察

森永 弘司(立命館大学)

大学1回生の習熟度別中級の27名クラスと、習熟度が一定ではない58名クラスに対して、Nationの語彙レベルテストと学習成績の相関を調査された。相関は前者で低く、後者でのみ高いため、人数を増して再調査すると報告されたが、フロアから、中級に統制されたグループでは人数の増減による相関への影響は少ないとの指摘があった。英語が不得意な学生の学習動機を低下させない成績評価法や真の読解力を見出そうという熱心な指導方針と工夫が伝わる発表であった。

シンポジウム2

授業における効果的な語彙指導を考える—語彙・記憶研究からの示唆と指導実践例—

池村 大一郎(京都府立朱雀高等学校)

門田 修平(関西学院大学)

溝畑 保之(大阪府立鳳高等学校)

高田 哲朗(京都教育大学附属高等学校)

語彙処理の理論と語彙指導の実践の両面からこのシンポジウムが行われた。まず門田講師から「語彙アクセス過程の自動化とその効用」と題して、メンタルレキシコンに関わる語彙研究及び語彙習得における自動化へ向けたモデル研究の御紹介があった。シャドーイングおよび音読の効用や、入門期の読み手と流暢な読み手の違いから自動化の重要性が説かれ、コンピュータ版処理テスト開発の必要性についての興味深い言及がなされた。

次に、池村講師から、「効果的な語彙指導に向けて—訳語・音韻・イメージの活用—」と題して、TPRのエッセンス（語彙とイメージの同時提示）を活用して、ワーキングメモリに活性化された音韻とイメージ及び訳語を結びつけ、語彙認知過程の自動化を行うことの大切さについて言及され、効果的な語彙学習・指導への示唆がなされた。

高田講師からは、「語彙指導を授業展開に組み込もう！」と題して、リーディング指導の中での語彙指導を組み入れることの重要性が説かれ、Key Wordの導入のためのOral Introduction、Word Huntingなど、様々な語彙指導とリーディングをマッチさせながら、語彙力の向上を図ることのできる指導実践についての報告がなされた。

溝畑講師からは、「語彙指導の観点から見るオーラルインタラクションの利点」と題して、視覚的補助教材を用いて内容を英語で聞かせ、英語のやり取りを通じて語彙の音声とイメージを活性化させていく、有効な語彙導入方法としてのOral Introductionの紹介とデモンストレーションが行われた。

報告者：上西 幸治（摂南大学）

第2日

研究発表・実践報告

《第1室》

報告者：池村 大一郎（京都府立朱雀高等学校）

リフレクティブ・プラクティスを通じた自己理解による教師の成長

松野 哲也（兵庫教育大学大学院）

本実践報告は、リフレクティブ・プラクティス、すなわち「教師の自律的成長」を目的とした内省と実践についてのものである。授業計画と内省を含むティーチング・ジャーナルを書き続ける中で、教師中心で生徒とのインタアクションが少ないという問題点を特定し、その問題を解決していく取り組みが報告された。内省による問題の発見とその解決という方法は、教師の成長に資するところが大きいと思われ、さらなる授業改善への実践が期待される。

英語教育を通じた教師の成長における“気づき”の重要性—プロジェクトベイストに行った中学校での授業実践から—

坂本 南美（兵庫教育大学大学院）

本研究発表では、9ヶ月間の授業実践についてのジャーナルライティングや、共同授業を行った教師との対談記録などの内省を分析し、個別のライティング活動という授業形態の妥当性や、外国の人とコミュニケーションをするための橋渡しという教師の役割などについての気づきが得られたことが報告された。このようなプロセスによりもたらされる気づきが、どのように授業改善に結びつくかにつてさらなる研究が期待される。

中学校英語科における初任者や臨時採用者への研修の在り方に関する研究

高木 浩志（神戸大学発達科学部附属住吉中学校）

団塊の世代の退職が始まり新規採用が増える中で、どのようにしたら若い教師に効率的に指導技術を授けることができるかについて、公立中学校の例を挙げながら報告と提言がなされた。初任者研修などの必須の研修が増える中で、授業についての研修が不足している問題点が指摘され、教育委員会、大学、学会などが連携して実践的な研修の機会を増やすという提言があり、この問題に一石を投じる発表であった。教育改革が話題となる中で、研修のあり方については小中高大のさまざまな関係者を巻き込んだ議論が必要であろう。

《第2室》

報告者：溝畑 保之（大阪府立鳳高等学校）

「“宿題”の10の原則」は日本の英語教育を救えるか？

高橋昌由（関西大学大学院）

宿題に関する日本の英語教育の問題点を、他国の教員の宿題に対する実態との比較を紹介し、Pisaなどの調査結果を交え整理した。これに基づき、宿題と授業との連携の観点で吟味し、効果的な宿題の10原則をまとめた。それに基づいた授業実践を行い生徒の反応を見たところ宿題の効果が検定で確認された。宿題のあり方を深く問う持つ発表で、宿題をやらない生徒の情意面をどう見るかなどの新たな課題がフロアより出された。

英語教育における社会文化的転回の可能性

吉田 達弘（兵庫教育大学）

従来の授業研究・教師研究の中では理論が作られ

教師がそれを実践するという捉え方がなされ、実践がうまくいかない場合、両者に乖離が生じることを問題点として挙げた。これを防ぐため、理論と実践をお互いが反射板にして高め合っていくなかで、実践での生きた経験を重要視し、教師の知の正当化を図る方向への転回を示された。教員のlearning portfolioを紹介しながら実践の振り返りを利用する研究の可能性を明らかにした。

The study of current oral communication materials, methodologies and new authentic materials focused on the lexical approach

両部 郁代(京都産業大学)

読解では高度な英文をこなす学生も英語での音声でのコミュニケーションではつまずきを見せる。その原因のひとつを現在の文法シラバスのテキストに不備があるとして、レキシカルアプローチに基づく教材を作成するようになった。Authentic material を用い、学生がテキスト内の collocations, fixed and semi-fixed expressionsに気づくtask-basedで、学習者中心で行う活動を用意した。この方向性は、事前に行ったネイティブと日本人英語教師に対する調査でも指示されていると報告された。

《第3室》

報告者：杉森 直樹(立命館大学)

法学部へのESP教育の導入—現状の問題点の分析を中心に—

大庭 沙蘭(関西大学大学院)

本発表は、法学部ESP教育における専門用語の訳語の問題を扱ったもので、日本語と英語との間で正しい訳語を当てはめることの難しさが述べられた。日本の法律用語は大陸法の影響が強いため、英米法の英語を和訳する場合に、正しく対応する用語がなかったり、多義性を適切に訳すのが難しい場合があることが実例を示して報告された。発表者からは、今後は法学英語コーパスや教科書の分析を行いたいとの意向が示された。

高校生に対する多読指導が、情意、読解ストラテジー、読解力、速読力に及ぼす影響—クラスター分析を利用した実証的研究—

今村 一博(大阪府立吹田東高等学校)

高校生を対象とした多読指導において、「英語学習に対する態度や動機」と「読解ストラテジー」に関するアンケート調査をそれぞれ行い、クラスター分析を行って学習者を4つの群に分けた。それぞれの群について、多読の効果や影響がどのように異なるかが調査された。その結果、異文化を持つ人々と英語で交流したり、英語圏の文化に興味を持ったりするような情意が極端に低い場合は、8ヶ月の多読では有意な変化が見られないクラスターがあることなどが報告された。

デジタル時代における外国語教育視聴覚教材のあり方を考える

東 淳一(流通科学大学)

最初に、外国語教育における画像利用の歴史について幾つかの実例を示しながら解説が行われ、その重要さが述べられた。次に、現在のデジタル化されたマルチメディア教材の問題点についての指摘がなされ、ビデオ教材においては、ただ動画を見せるだけでなく、その場面におけるキーワード等を図示することの必要性が述べられた。TTSを用いたマルチメディア教材開発の手法等も示され、文字だけでなく絵を使って語彙を教える必要性を考えさせられる発表であった。

《第4室》

報告者：石川 慎一郎(神戸大学)

可算名詞と不可算名詞の間に見られる変動性—「奨学金」を意味する語を中心に—

土屋 知洋(関西学院大学大学院)

scholarshipは、通例、可算名詞とされるが、不可算用法もいくらか存在することが知られている。土屋氏は主として不可算名詞のscholarshipに注目し、コーパスやインフォーマントチェックによる精緻な分析を通して、それが、奨学金というカネそのものを指す場合が多いことを明らかにした。質疑応答では、インフォーマントチェックの在り方、可算名詞との関係、などの点が議論された。

コーパスに基づく関係代名詞whichの用法の記述的調査

天谷 ことみ(神戸大学大学院)

whichを含む文としては、制限節と非制限節が

存在する。天谷氏は、二つの節の違いを主として先行詞の形態から分析した。コーパスに基づく調査の結果、非制限節では、つづり字の短い単数形具象名詞が、制限節ではつづり字の長い複数形抽象名詞がそれぞれ先行詞におかれやすいという傾向が報告された。質疑応答では、whoなどの他の関係詞との関係、言語事実の背後にある理由、などの点が議論された。

コミュニケーション方略の指導効果について

泉 恵美子(京都教育大学)

泉氏は、コミュニケーション方略(CS)の指導可能性を検証すべく、<明示的CS指導+方略タスク>グループ、<方略タスク>グループ、統制グループの3つに分けて実験を行い、最初のグループが最も指導効果が高いことを明らかにした。精緻な分析をふまえて導き出された結果は教育現場にもきわめて示唆に富むものである。質疑応答では、delayed testの内容、post testにおける得点変動などの点が議論された。

講演

歴代首相の言語力：小泉スタイルと安倍スタイル

東 照二先生(立命館大学)

「英語教師にとっての話し方スタイルとは？」

ことばの使い方を教えることを生業とするのがわれわれ英語教師。その「ことばを教える」仕事の原点を気づかせていただいた話だった。世は「話し手責任」になってしまった 英語教師たる者まずこのことに気づき、話す技量とその根底にある「人柄」「人間力」を磨かないといけないとのメッセージが、興味深い事例を通して、伝えられた。

興味深い事例は、2項対立として展開された。社会言語的な視点から人間の言語使用のスタイルを観察すると、2種類あるという。それぞれの極を象徴する人物として、小泉前首相(K)と安倍現首相(A)があげられ、以下のような特徴を有する。

A型：レポート・トーク、情報、they-code、建前、inarticulate、hard power

K型：レポート・トーク、情緒、we-code、本音、articulate、soft power

日本語表現「ございます」はA型で、「仮面を

かぶった」印象を与えるのに対し、K型の「あります」が聞き手に与えるインパクトはずっと大きい。George BushはK型であり、Al Goreは超理論派で典型的なA型になる。東国原宮崎県知事はK型で、人気と支持率の高さはこの言語使用に依るところが大きいという。(英国のTony Blair首相については、未分析とのことであるが、筆者は言語教育に携わるものとして必要な姿勢である「誠実に一所懸命ことばで説得しようとする」

B(lair)型としたい。)具体例を使った社会言語学的言語解釈も啓蒙的かつ秀逸であった。

これらの表現に込められた社会的な背景とともに、授業で教えたい英語の諸相である。

(Re-framing) used car pre-owned vehicle(高級車の場合)

(Meta-message) Why don't you ask me how my day was? Say something, otherwise... (夫婦の会話?)

感想として、言語使用スタイルはたしかに複数に類型化されるであろうが、「ことばは人、人はことば」とすれば、自分に合わないスタイルは所詮格好がつかないであろう。英語教師としては、自分らしい英語スタイルを学習者に示すことができればよいのではなかろうか。

報告者：沖原 勝昭(神戸大学)

2008年度第12回研究大会のお知らせ
2008年5月：神戸大学

第33回全国英語教育学会大分研究大会について

日時：2007年8月4日(土)・5日(日)

会場：大分大学教養教育棟

大会日程

8月4日(土)

自由研究発表・実践報告、課題研究フォーラム、問題別討論会、総会、懇親会

8月5日(日)

自由研究発表・実践報告、シンポジウム

詳細情報は、[<http://www.jasele2007oita.info/>]をご覧ください。

紀要へのご投稿を

ご承知のように、昨年度の紀要編集関連規定の改定にともない、本会紀要SELTは、KELESもしくは

は全国英語教育学会の当該年度研究大会発表論文を優先して審査することになりました。ついては、5月のKELES大会(摂南大学)、および8月の全国英語教育学会大会(大分大学)で研究発表をなさった方は、大きなチャンスですので、ぜひとも発表原稿を練り直し、10月末日までにSELTにご投稿ください。また、上記の学会発表を経ない論文も引き続き募集しております(一定の枠あり)。多くの会員のみなさまからのご投稿をお待ちしています。なお、刊行までのスケジュールは以下の通りです。

2007年10月1日	投稿受付開始
2007年10月30日	投稿受付締切
2007年11月30日	査読結果通知
2008年1月31日	修正原稿締切
2008年3月31日	刊行

< 注意事項 >

- 1) 発行規定、投稿要領は次のURLをご覧ください。[<http://keles.hp.infoseek.co.jp/kiyou.html>] また、昨年度会員の方は送付済みのSELT30号の巻末にも掲載されています。
- 2) 投稿論文には氏名・所属は記載しません。投稿要領2(1)を再度ご確認ください。
- 3) 分量は一律10ページです。
- 4) 投稿時点において、2007年度会費が納入済みであることが必要です。

紀要編集委員会 委員長
石川 慎一郎(神戸大学)

今後のKELESセミナーの予定

第6回(大阪地区)セミナー

日程：2007年7月7日(土)

題目：「英語教師のための統計学入門」

講師：水本 篤氏(流通科学大学)

なお、詳細については、同封の案内状をご覧ください。

第7回(神戸地区)セミナー

日程：2007年10月20日(土)

題目：「小学校英語から考える活気ある英語教育」

講師：横田 玲子氏(神戸市外国語大学)

第8回(京都地区)セミナー

日程：2007年12月16日(日)

題目：「英語教育に役立つインターネットサイト活用術」

講師：石川 保茂氏(京都外国語大学)

第9回(奈良地区)セミナー

日程：(未定)

会場：天理大学(予定)

題目：(未定)

第10回(和歌山地区)セミナー

日程：2008年3月

会場：和歌山大学(予定)

題目：(未定)

第11回卒論・修論研究発表セミナーのお知らせ

第11回卒論・修論研究発表セミナーは、2008年2月16日(土)に流通科学大学にて開催されます。発表受付は2007年12月から行う予定です。学生の皆さん、奮ってご応募ください。

事務局から

◇会費納入のお願い

2007年度の会費を未納の方は、3月末に送付いたしましたSELT30号の表紙裏に挟み込んである振込取扱票にて最寄の郵便局でご納入ください。よろしくお願いいたします。SELT31号に投稿いただく方は、投稿時点において2007年度会費が納入済みであることが必要です。また、2008年度(来年度)の全国英語教育学会での研究発表をご希望の方は、関西の年会費とあわせて全国の年会費をご納入ください。

年会費は以下の通りです。

1. 一般会員(関西のみ) 5,000円
2. 一般会員(関西+全国) 7,000円
3. 学生会員(関西のみ) 3,000円
4. 学生会員(関西+全国) 5,000円
5. 賛助会員 12,000円

なお、会費納入に関するお問い合わせは、会計岡 良和[oka@uhe.ac.jp]までお願いいたします。

◇新入会員紹介

(3月17日以降6月4日入金確認まで)

川崎 真理子

中川 右也

平尾 日出夫

袁 園

大賀 晃代

近藤 睦美
土屋 知洋
天野 浩志
飯田 由幸
磯部 ゆかり
上西 幸治
植松 茂男
榎本 隆
小比賀 豊
河原 俊昭
小林 和代
齋藤 安以子
菅井 康祐
立花 千尋
壺倉 恵子
津村 正之
中村 紘子
成田 一
能勢 卓
平田 悠馬
藤澤 篤志
山下 典子
山中 由香
東野 厚子
田中 泰明
八尾 英紀

平島 晶子

牧田 快

(敬称略、入会順)

◇役員の新所属先

顧問

齋藤 栄二(京都外国語大学)

会計監査

佐藤 恭子(追手門学院大学)

(敬称略, 2007年4月1日現在)

◇紀要DVD販売のお知らせ

会員特別価格 3,000円

『英語教育研究』過去28年分、『卒論・修論研究発表セミナー発表論文集』過去9年分(いずれも2005年度刊行分まで)をすべて電子化。鮮明な画像で論文を通読できるほか、OCRによるテキスト情報を埋め込みましたので、論文内の単語などでの検索も可能になりました(ただし、OCRの認識率は100%ではなく、完全な検索はできません)。

KELESの歩みの記録として、また、英語教育研究の必携情報レポジトリとして、ぜひお手元におそろえください。なお、購入に関するお問い合わせは、会計岡 良和[oka@uhe.ac.jp]までお願いいたします。

事務局よりお願い

学会HPにて最新情報が随時更新されますので、
頻繁に閲覧いただきますようお願いいたします。

KELES HP: <http://keles.hp.infoseek.co.jp/>